

# 兵庫県医師会会報

## ○編集後記

平成 21 年 10 月号(通巻 672 号)

先月号の勤務医特集はいかがでしたでしょうか。広報委員会では委員のみなさんが知恵を出し合って充実した紙面が作れるように頑張っています。勤務医の問題は日本の医療の問題でもあります。先生方の御意見をお待ちしております。

私は病院の院長ではありますが、勤務医でもあります。特集号の原稿を用意していたのですが、他の先生方がまじめな内容でしたので、少々オチャラケの原稿は遠慮してしまいました。この場をお借りして、載せさせていただきます。

『あっ、髭がない』

ある朝、鏡を見ると髭が右半分だけ無くなっていました。それは当直明けの朝の洗面台の前でした。十数年ぶりで見ると髭のない鼻の下と顎、それも右半分だけ。しばらく呆然として何がなんだかわかりませんでした。ようやく冷静になると、パンツを履き忘れたようで恥ずかしく、そして間が抜けていて笑ってしまいました。

ことの真相はこうです。髭用の電気カミソリをご存じの方は少ないと思います。バリカンのようになっていて、長さを調整しながら髭を剃ります。“1～10”の目盛りがあって、いつもは“5”で剃るのですが、見ると目盛りが“1”になっていました。気付かずに右半分に剃ってしまったのです。

なぜ勤務医問題と関係あるのか。院長といえども中小の病院では当直をするのが当たり前ですし、50を過ぎても当直します。慣れてるとはいえ、土曜の勤務後に土日当直をして、これから午前診が始まるという月曜日の朝はつらいものがあります。若い頃とは違って、当直室ではぐっすり眠れません。ボーッとしていて、呆然としてしまったわけです。勤務医の過重労働によって私の髭は無くなりました。私のような仕事の状況は、勤務医としては当たり前のことで、過重労働とは考えてきませんでした。ただ、世間一般では50を過ぎた会社の社長や部長が何十時間も宿直勤務をするとは考えられません。このような過重労働はわれわれの犠牲で何とか成り立っていただけで、あちこちに綻びが見え始めました。何とかしなければなりません。

左半分に残った髭の後始末。冷静になったあと、鏡を見ながら5分ほど善後策を考えました。結論は「全部剃る」でした。当たり前ですけどね。すぐに、外来が始まります。恥ずかしいのでマスクをつけて仕事を始めました。お昼にはうっとうしくなって、はずしてしまいました。悲しいかな、本人の自意識と

は別に職員の誰もが、院長先生の髭が無くなったことに気付いてくれないまま、夕方まで過ごしました。髭がきちんと生えるには、途中のボサボサの無精髭の時期があるので、少なくとも2～3週間は必要です。髭が戻るには長めの休みが必要ですが、かないません。髭の復活にも勤務医問題が大きく関わってきます。